

親鸞における『論註』性功德積の意義

後 藤 明 信

一

親鸞は『教行信証』『真仏土文類』に曇鸞の『往生論註』(以下『論註』と略す)巻上の性功德積を引用する。「真仏土文類」は、その冒頭に、

謹按「真仏土」者、仏者則是不可思議光如来、土者亦是無量光明土也。然則酬「報大悲誓願」故、曰「真報仏土」。既而有願、即光明・壽命之願是也。(真聖全Ⅱ・二二〇頁)

と示されるように、真仏・真土を明らかにされるものである。それに続く、経論積の引用も、その意を助顯するものにはかならない。

その中、天親の『浄土論』(以下『論』と略す)、『論註』の引用は、次の通りである。まず『論』より、

世尊我一心 歸命尽十方 無導光如来 願生安樂國
觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 廣大無邊際

印度學佛教學研究第四十四卷第二号 成平八年三月

と偈頌より二文が引かれ、最初の一文により、真仏を、清淨功德の一文により真土を示したものである。そのことは、「真仏土文類」の終りに出される真偈対弁積に、

言「真仏」者、『大經』言「無邊光仏・無導光仏」又言「諸仏中之王也、光明中之極尊也。」「論」曰「歸命尽十方無導光如来」也。言「真土」者、『大經』言「無量光明土。」或言「諸智土。」「論」曰「究竟如虚空廣大無邊際」也。(真聖全Ⅱ・一四二頁)
と、真仏土を重ねて積される時に、異訳も含めた『大經』と、『論』の言葉をもってされることを考えると、「真仏土文類」における『論』『論註』の重要性が確認されるところにも、その引用の意図するところも明らかにになる。

『論』の二文に続けて、『論註』より六文引用される。⁽¹⁾

- (1) 卷下 觀察体相章 清淨功德の文
- (2) 卷上 性功德の文
- (3) 卷上 大義門功德の文
- (4) 卷下 觀察体相章 「不可思議力」を積する文

(5) 卷下 観察体相章 「示現自利他」を積する文

(6) 卷下 観察体相章 不虚作住持功德の文

この中、直接問題にするのは(2)卷上、性功德の文である。

その前に出される清浄功德の文を見ると、これはすでに「証文類」にも引かれているが、ここでは浄土そのものの持つあり方を、衆生の往生との関わりを通して示されたものと考えられる。すなわち、『論』の「観彼世界相勝過三界道」を積するに、浄土の三界道に勝過するあり方を、「凡夫人煩惱成就せる有て、また彼の浄土に生を得るに、三界の繋業畢竟して牽かず。則ちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得」と、煩惱成就の凡夫人が、三界の繋業を牽くことなく、涅槃そのものを得ることをもって示される。

『尊号真像銘文』に『論』の言葉を积して、

尽十方無碍光如来とまふすはすなはち阿弥陀如来なり、この如来は光明なり、尽十方といふは、尽はつくすといふ、ことごとくといふ、十方世界をつくしてことごとくみちたまへるなり。無碍といふはさわるることなしと也、さわることまふすは衆生の煩惱悪業にさえられざる也。光如来とまふすは阿弥陀仏なり、(真聖全Ⅱ・五八四頁)

とある。このように、衆生の悪業煩惱にさえられざる阿弥陀仏のはたらきを「無碍」という語において示されている。

真仏・真土は「煩惱成就の凡夫人」、「衆生の悪業煩惱」を

離れてはあり得ないのであり、一切衆生をして平等にさとらしめることにおいて真仏・真土ということができよう。ここに、真仏・真土のあり方と、一切衆生を浄土往生せしめ、さとりを得しめることを誓われた本願との関わりが問題となる。

二

『論註』で法蔵菩薩に言及される所は、六ヶ所である。その中、五ヶ所はこの「真仏土文類」に引かれている。これは、阿弥陀仏の本願をその発願の行者たる法蔵菩薩を「示すことにより、真仏・真土の阿弥陀仏の本願との関係を具体的にしようとするものであろう。

『論註』において『論』の三蔵二十九種の浄土莊嚴を説明する上に、その根底に阿弥陀仏の本願力を見出さんとされていることは、『論註』上巻の偈頌に示される一々の莊嚴を積するに、「仏本この莊嚴功德を起こす所以は」、「仏本何が故ぞこの莊嚴を起こす」といい、あるいは「仏本何が故ぞこの願を起こす」というような問いかけをしながら、所為の境たる三界という現実世界の様々な相を示し、そこに三界を越えしめ、浄土に至らしめんとする仏の大慈悲心を、そのはたらきが成仏において約束されるような本願という形で説かれることに明らかである。³⁾

「真仏土文類」においては、真仏土を示すに、法蔵菩薩の本願（因願）と阿弥陀仏の本願力（果力）をもってされる。これは不虚作住持功德の文に顯著である。

不虚作住持功德成就者、蓋是阿弥陀如来本願力也。乃至所言不虚作住持者、依本法蔵菩薩四十八願、今日阿弥陀如来自在神力。このことは、性功德の文にも窺うことができる。

三

性功德の積では、その「性」の四義をあげる。まず最初に、

性は本義。言此浄土隨順法性、不乖法本、事同華嚴經宝如来性起義。

といて、浄土の莊嚴されることを如来の性起、すなわち如来の出現として理解されている。これは法性顯現、真如の必然的展開であり、浄土の莊嚴が、如来の語そのものがそうであるように「あるがままにある」、「縁起の道理のあるが如くにおかれている」と解されるあり方であることを示すものである。そしてこれに続く三義において、この展開の具体的内容に言及されている。第二の積習の義について、

又言、積習成性。指法蔵菩薩集諸波羅蜜、積習所成。

というのは、法蔵菩薩における智慧の完成をそれに至る過程において示されたもので、それは浄土が法蔵菩薩因位の修行

親鸞における『論註』性功德積の意義（後藤）

の結実であることを示すものであり、その結実の果を性として説示されたものである。そして、次の第三聖種性の義について、

亦言性者是聖種性。序法蔵菩薩、於世自在王仏所悟無生忍、爾時位名聖種性。於是性中、發四十八大願、修起此土。即曰安樂浄土、是彼因所得。果中説因、故名爲性。

というのは、四十八願が聖種性位において発起され、そのことによって三嚴二十九種の浄土莊嚴が形成されたことを示すのである。そして最後の必然不改の義については、

又言性者、是必然義、不改義。如海性一味、衆流入者必爲一味、海味不隨彼改也。又如人身性不淨故、種種妙好色・香味、入身皆爲不淨。安樂浄土、諸往生者、無不淨色、無不淨心。畢竟皆得清淨平等無爲法身。以安樂国土清淨性成就故。といて、浄土が一切のものを清浄化するはたらきを持つことを説いている。

四

このように浄土莊嚴は、阿弥陀仏の四十八願に具体化されるように、衆生を憐愍し救済せんとする大慈悲を契機とする真如法性の等流的、必然的展開である。この浄土が一切のものを清浄化するという力用を持つことを説かれるのは、浄土としての展開が、まさに真如の智慧を全うして離れず、また

常に真如法性を志向せしめるということを示す。

これは、三蔵二十九種の最初に説かれる。清淨功徳の上に窺うことができる。すなわち浄土が莊嚴されるという世間的な相をとりながらも、「觀彼世界相 勝過三界道」という如く、出世間の方向性を持つものである。このことは浄土莊嚴の本質を示すものであり、三蔵二十九種の全体に及ぶものにはかならない。

また「性」の四義の中、積習成性と聖種性において、浄土は法蔵菩薩の波羅蜜の実踐行により完成したものであること、世自在王仏のもとで無生法忍のさとりを得たその位において四十八願を起し、修行を積んで浄土を完成したものであることが示されていた。これは法蔵菩薩の発願、修行が無生法忍のさとりの上になされたものであること、本の義において示された性起、法そのものの顯現を具体的に法蔵菩薩の発願、修行というを通して明かされたものであり、法蔵菩薩の発願、修行が、慈悲としての展開にはかならないとすることができよう。必然不敗の義は、果力を示すものである。「畢竟して皆清淨平等無為法身を得しむ。安樂国土清淨性成就したまへるを以ての故なり。」と、独自の訓みにより、法蔵菩薩の所成の意を示されていることが注意されるのである。浄土に生まれたものは、すべて清淨平等のさとりである無為法身を得るといふあり方は、大慈悲そのものを示し、

「法蔵菩薩の出世の善根」の果として成就したものにほかならない。

以上、法蔵菩薩との関わりを通して性功徳積を窺ってきた。「酬報大悲誓願」の問題、真実功徳積、二種法身説との関連性など課題が多く残されたが後日を期したい。

1 真聖全Ⅱ・一三三頁～一三五頁。

2 真聖全Ⅰ・一〇五頁。

3 拙論「論、論註における仏身と浄土」九州龍谷短期大学仏教文化研究所『仏教文化』第三号参照。

4 藤堂恭俊氏「無量寿經論註に説示せられたる仏身土に関する見解」『仏教文化研究』2・八五頁。

〈キーワード〉 真仏土、『論註』、性功徳、法蔵菩薩

(九州龍谷短期大学講師)